慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	〔追悼座談会〕関口一郎さんとドイツ語教育
Sub Title	〔Gesprächsrunde〕Prof. Ichiro Sekiguchi und Deutsch als Fremdsprache in Japan
Author	大谷, 弘道(Otani, Kodo) 中山, 純(Nakayama, Jun) 斎藤, 太郎(Saito, Taro) 三瓶, 愼一(Sambe, Shinichi) 平高, 史也(Hirataka, Fumiya) 識名, 章喜(Sikina, Akiyoshi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2003
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・ 文学 No.35 (2003. 2) ,p.211- 225
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	開催日: 2002年8月6日
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20030210-0211

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

追悼座談会

――関口一郎さんとドイツ語教育――

出席者
大谷弘道（理工学部）
中山　純（経済学部）
斎藤太郎（文学部）
三瓶慎一（法学部）
平高史也（総合政策学部）
司会　識名章喜（商学部）

識名章喜（以下識名）　関口さんの追悼号ということで，各学部から関口さんとご縁のあった方々に集まっていただきました。影響を受けた方もいらっしゃれば，教えを受けた方もいらっしゃいます。この座談会では，関口さんが我々に残してくれたものは何なのか，ドイツ語教育に与えた影響は何なのか，我々はそれを今後どう継承していくのか，ざっくばらんに語ってください。

まず，私と関口さんのことをお話ししたいと思います。私は1983年に慶應の商学部に就職しましたが，当時何も分からなかった私は，先輩である関口さんからドイツ語教育についていろいろ手ほどきを受けました。それだけでなく，藤沢に移籍されるまで関口さんの哲学や教育方針については，折りにふれ話をうかがいました。皆さんにお話いただく前に，私が関口さんについて思っていることをまとめてみます。

当時の商学部は，他の学部でもそうですが，ドイツ語やフランス語が2大勢力で，スペイン語や中国語といった他の語学は教えられていませんでした。特にドイツ語は1クラスが50人を超えるような状況の中で，80年代の初期，授業をやっていました。その頃は年輩の先生方も多く，ドイツ語の教員の中には「文法をしっかりたたき込め」という方針の方が大半でし

た。そうした状況の中で，関口さんは「授業に会話やコミュニケシーションをもっと取り入れたい」，「ドイツ語を学ぶのに苦痛を感じるのではなく，学生たちと一緒に楽しく勉強できないだろうか」という視点を絶えず持っていたように思います。そういうことを私たちにも繰り返し強調されていました。逆に言えば，年輩の先生方は，どちらかと言うと，ドイツ語を教えるということについて，学生管理の道具としての初習語学という捉え方をしていて，厳しく，ガンガンやっていた先生もおられました。そういうなかで，関口さんがすばらしかったのは，対立を浮き立たせるのではなく，「文法も重要で，コミュニケーションも重要」という視点を非常に巧みに取り入れて，授業のなかで工夫を重ねておられたことです。私たちにもそうした工夫をしろと，ずいぶん刺激を与えてくれました。

もう一点，ドイツ語を学ぶ若い人たちに大きな影響を与えたことがあります。ここにいらっしゃる斎藤さんや三瓶さんは，当時，関口さんが毎夏行っていたドイツ語の有志による合宿の学生でしたし，現在理工学部で教えている横山由広さんもその学生の一人でした。経済学部のクナウプさんや，大谷さん，中山さん，そして私も合宿の講師として参加しました。顔が広く，オーガナイザーとしても大変活躍されたと思います。そして関口さんに影響を受けた世代が，着実に成長し，ドイツ語の教員として教壇に立っています。

また，関口さんは『「学ぶ」から「使う」外国語へ』という新書版の本（集英社新書，2000年4月）を出版しています。そこでも強調されていますが，関口さんの教育法のポイントは，関口さん自身の体験を基に，ドイツ語習得に苦労した人の視点からのアイディアが出されていることです。これには私はとても感心します。ドイツ語ドイツ文学科を出て大学に残った，たいていの大学教員の場合，本当にできたかどうかはともかく，ドイツ語学習にそう苦労しないから，基本的にドイツ語ができるから，残るわけですよね。そういった先生方は往々にして，できない学生のことはあまり分かりません。関口さんはそのあたりがかなり分かった先生だったと思いま

す。だからこそ，できない学生に対しても，どうやって楽しく学習させるかというアイディアをたくさん持っていたのだと記憶しています。そういう意味で，ベストセラーになったビデオ教材『ハロー，ミュンヒェン』（白水社）は関口さんのアイディアが一杯詰まった教科書だと捉えているんです。

というように，関口さんがドイツ語教育に遺されたものは数え切れないほどあると思うのですが，それと同時にみなさんにも，関口さんに対して数々の思い出やエピソードがあると思います。このなかで最も関口さんとつきあいが長かった大谷さん，いかがでしょう。

大谷弘道（以下大谷）　彼はドイツ留学を機にものすごい勢いで変わったんですよね。まさに“陰”から“陽”に。みなさんはおそらく彼の“陽”の部分しか知らないと思うんですが，以前は斜に構えて文学を語る人だった。それがドイツに行って，正面からきちんと相手を見てドイツ語教育を語るという人に変わった。彼に1年遅れてアーヘンに行った僕は，その変わり様にギョッとしました。何かがあったはず，何かを体験したはずだと思い，何度か話をしているうちになるほどと納得したことがあります。彼は，ドイツで，ドイツ語を通して，言葉の原点，または言葉の持っている特性のようなものに気がつくような体験をしたのではないか。つまり，知識としての言葉というよりも，創造の原点としての言葉に気づくような体験をしたのではないかと思うんです。

帰国後，彼は「夏に合宿をやろうよ」と言い出し，それ以降ほとんど毎夏彼につきあわされました。最初の何回かは試行錯誤だったのですが，何年かたつうちに，あるパターンが形成されてきた。学生をグループに分けて，寸劇をやらせ，それを映像に撮るというものです。学生に台本を書かせ，ドイツ語に訳させ，学生にカメラの前で演じさせる。要するに，何かを創造するプロセスのなかでドイツ語を学んでいくわけです。その結果，いろいろなタイプの教え子が育ち，なかにはドイツ語に取り付かれた人間も生まれてきました。だから楽しいドイツ語といっても，いわゆるゲーム

をする楽しさではない。関口さんの言う楽しさとは，言葉を使って何かを作り出すダイナミズムなのではないでしょうか。彼の場合は，よく言われるような「教養のドイツ語」「スキルのドイツ語」を乗り越えて，何かもっと原点に立つような体験が基盤にあったのだろうと思っています。

識名　中山さんもこの合宿に何度か参加されてますよね。

中山　純（以下中山）　確か，82年か，83年のことですね。私がドイツ語教員になりたての頃です。そもそも関口さんと知り合ったのは，81年のリングイステン・ゼミナールです。当時，大磯にアカデミーハウスがあって，いつもそこで学会の語学ゼミナールが行われていました。そのゼミナールの最中に「東京に帰ったら，僕たち若手がやっている勉強会に参加しないか？」と誘われ，連れて行っていただきました。勉強会の参加者には上田浩二（筑波大学），三島憲一（大阪大学），友田舜三（大阪外国語大学），宮内敬太郎（立教大学），在間 進（東京外国語大学）など，いまをときめくメンバーが集まっていました。彼らはいまやドイツ語教育界のオピニオン・リーダーとなっていますが，この勉強会では非常に熱くドイツ語教育の問題点などについて議論が闘わされました。僕が関口さんから受けた一番大きな影響は，そんなメンバーが集う場に参加し，これまで認識さえしていなかった問題点に気づかせてもらったことですし，そのことをまず思い出します。

その流れのなかで，彼がやっている合宿を手伝わないかと誘われたわけです。ただ話をするだけでなく，普段の授業の枠組みの外で実践の場としていろいろなことを教えてみないかと。先ほど大谷さんが紹介なさった，ビデオを使ったグループワークなど新しい取り組みをたくさんやりました。あれから20年近くたっていますが，当時やっていたことはちっとも古くなっていない。そのまま続けていられるし，いまの仕事にもいろいろな形でつながっています。関口さんは，その後のドイツ語教員としての自分の生き方を決定的に影響づけたひとりとも言えますね。

識名　現在なさっていることにも影響を与えているとおっしゃいましたが，

中山さんはいまNHKテレビ講座の講師を務めていらっしゃいますが，企画をたてるうえで，関口さんのアイディアを意識されていますか？

中山　関口さんも何年間かNHKのテレビ講座を担当していましたし，勉強会に参加していた上田浩二さんや，大谷さんもNHKのテレビ講座の経験者です。みんな表現方法はちがっていても，あの当時関口さんを中心に激論を交わしたドイツ語教育の哲学をベースにしていると思います。

識名　大谷さんと中山さんは合宿で教える側の立場でしたが，斎藤さんは逆に教育を受けた立場ですね？

斎藤太郎（以下斎藤）　教育を受けたというほど，毎回出席していた優等生ではありませんでしたが（笑）。最初は，大学院の修士2年生の時に独文の院生に誘われて参加しました。当時，慶應の独文では，何年か前からドイツ人の講師が専任に近い形でいて，ぼちぼちコミュニケーションの勉強も始まってはいたんですが，基本的には読む力をつけるということに専ら主眼が置かれていました。関口さんは，識名さんがおっしゃっていたように，自分の歩んできた道を振り返って，同じような苦しみを繰り返してほしくないという思いがとても強かった方です。「文学部の勉強は重要なので，確かにそれはそれでやらなければならないが，やはり言葉というものは生きて使えるものでなくてはいけない」と常におっしゃっていました。訳読だけでなく，使う力を養わないと，バランスのとれた言語能力は身に付かないという思いがあったんですね。だから，大学院生にも声をかけていたんだと思います。

当時は「楽しかった」だけで終わった合宿ですが，その体験は自分の中に残りました。後に自分が関口さんと同じようにドイツに留学して，帰国して，文学部の助手になってから，慶應の独文科のドイツ語合宿を始めましたのも，この体験のせいかもしれません。当時の文学部の学生は，どちらかというと文学青年で，引っ込み思案で，人とドイツ語で話すなんて苦手というタイプの学生が多かったんですが，そうした学生にも言葉を使う楽しさを何とか伝えられたらと思って始めました。必ずしも関口さんのや

り方と同じではありませんが，やはり根の部分には，関口さんが教えてくださった，あの合宿の体験があるのではないかと思います。そういう意味からも，振り返ってみると，関口さんの影響を強く感じます。

また，関口さんというと「お酒」というイメージが強い。酒を飲んだ席で，よく「自分が辿ってきた過ちを君たちはしてはいけない」と言っていました。なかでも「自分は昔は文学青年で小説を書いていた。群像の新人賞の候補にもなった」という話に驚いた記憶があります。「ドイツ語教師になりたての頃は，初級文法が終わったばかりの学生にトーマス・マンを読ませてみたりして，いまから思うと恥ずかしい」ともおっしゃっていましたね。僕自身，当時助手になったばかりの頃で，ある意味生意気でしたから，関口さんのおっしゃることをすべて受け入れていたわけではなく，反発する部分もかなりありました。でも，いま，自分がこの年になると，まだまだ訳読法が中心で，文法をガチガチに教えるのが主流だった時代に，学生と同じ視線を共有しつつ，ドイツ語教育を考えようとしていた関口さんの姿勢は一貫していたなと，それが当時においてはどれほど斬新だったか，よく分かります。

識名　三瓶さんも関口さんの合宿に常連として参加されて，現在はドイツ語教員となっています。三瓶さんの場合はいかがでしたか？

三瓶慎一（以下三瓶）　関口さんと最初に出会ったのは，1982年の野尻湖合宿なんですが，春・夏とやっていて，確か2回目か3回目のことだと思います。その時の関口さんの年齢を私はもう超えてしまったので，当時を思い起こしてみると，関口さんも若かったんだなと思います。その合宿は私が引き継いで10数年やり，その後，太田達也さん（本塾非常勤講師）や草本 晶さん（麗澤大学講師）がさらに引き継いでくれています。そういう意味では，関口さんの遺志は孫弟子まで伝わっていると言えるんじゃないでしょうか。

その合宿がどうして始まったかというと，東大の先生たちが中心になってやっていた「インターウニ・ゼミナール」での辛い経験からだそうです。

そこに一度学生を連れて参加したところ，学生たちが何も聞き取れないし，何も言えなかった。そこで，自分たちで合宿を立ち上げないわけにはいかなくなったと聞きました。そこで，もうある程度できるようになった人ではなく，これからできるようになってほしい人や発展途上の人たちに，いかに楽しくドイツ語を勉強してもらうか，それもいわゆる関口流のまったく違った視点からのコンセプトで合宿が始まったわけです。当時，私は早稲田の3年生でした。とはいってもドイツに1年半留学して帰ってきたばかりで，実際には5年生だったんですが，その合宿に参加して関口さんに出会ったわけです。関口さんは，留学を経験して，何も考えずにドイツ語ができるようになってしまった学生はあまり好きじゃなくて，いまいろいろ悩んだりもがいたりして，自分と同じような経験をしている学生たちと目線を同じにしていたのだろうなと思います。

たとえば，その合宿ではこんなことをやっていました。学生をグループに分け，日本のテレビ番組を各グループに割り振ります。ラジオ体操やワイドショー，野球中継などをドイツ語で表現してみろというわけです。またある年には日本のコマーシャルをドイツ語で再現してみるなど，とんでもないテーマがいろいろと出てきました。それは自分がふだん見ているテレビをもう少し別の角度から見てみるだけでなく，ドイツ語で再現するとどういう違和感があるのかといったことを感じさせる目的があったのでしょう。自分が異文化の中に飛び込んでいった時に感じる違和感を，日本にいながらにして疑似体験させることが目的だったのだろうと思います。

合宿では，その他にもいろいろな実験的な試みが行われました。一度“これはやられた！　はめられた！”と感じたのは，経済学部にいらっしゃるクナウプさんなど数人のドイツ人の先生が日本の商業捕鯨の姿勢やマンガ文化を強く批判したセッションです。こうした批判に対して，ある程度ドイツ語ができる学生・大学院生は猛然と反論を試みました。セッションが終わってから，ドイツ人の方々はみんな「ごめんね，本気じゃなかったんだけど。関口先生にこうやれ，とにかく学生を挑発しろと言われたんだ

よ」と，そっと謝ってくれたんです。つまり学生は関口さんの仕組んだ挑発にまんまとのってしまった。みんなドイツ語をある程度できるはずなのに，そういった場で喋ろうとしない。ぬくぬくと合宿を楽しんでいる学生たちに，関口さんは頭から冷や水を浴びせかけたわけです。

関口さんはお酒を飲むと，一晩中，自分がなぜドイツ語教師になったのか，なぜドイツ語を学んでいるのかなど，関口さん流の言葉で言うところの「生き様」の話に終始しました。われわれドイツ語教師の卵的存在が関口さんに意見をすると，「おれの生き様なんか分からないだろう？」といつも逃げられてしまい，いつも悔しい思いをしていました。しかしいまになって思うと，大谷さんがおっしゃったように，若い頃の体験が関口さんの大きな転機で，そうした体験を自覚的にでもしていない人たちには理解できなかったところがあるのかもしれませんね。

もう一言付け加えるなら，留学を100%順風満帆で過ごしたという人はおそらく皆無でしょう。全員何らかの苦労をして成長を遂げ，帰国し，ドイツ語教師なりの仕事を全うしていくんだと思うんですが，誰しも留学中の恥ずかしい体験をあえて語りたくない。かく言う私も，いまから思うと顔から火が出るようなことを留学中には積み重ねてきたわけです。しかし関口さんは，『「学ぶ」から「使う」外国語』のなかや，普段の話のなかで，自分の体験をすべてさらけ出していました。この本を読むたびに，“そういうことも考えないでドイツ語教師をやっていてはいけないんだ”と，改めて再認識させられます。小さい本ですが，亡くなる前にこれを残してくださったことは，非常に貴重なことだと思います。

識名　関口さんは，新学部の設立にあたって新しい語学教育の構想を実現しようと，藤沢に移られました。平高さんは，関口さんの作られた新しい語学教育システムの継承者として，藤沢で教えておられますが，関口さんの思い出はいかがでしょう？

平高文也（以下平高）　関口さんと初めてお会いしたのは，斎藤さんも編集委員をされていたドイツ語教育部会の会報を編集していた時ですね。そ

の後しばらくして，87年に藤沢に来ないかと声をかけてもらいました。当時は確か，NHKのテレビドイツ語講座をやっていらっしゃった最後の頃だと思います。藤沢キャンパスの外国語のシステムを，鈴木孝夫先生もコンセプトの部分で関わっていらっしゃいますが，ほとんどひとりで作られた。この総合講座諸国語概説は90年にスタートして，最初の5，6年は特に画期的な試みとして注目を浴びました。英語だけが外国語じゃない。受験勉強に疲れた頭をしばらく休めて，英語の他にも外国語があるということをゆっくり考えなさい。そして6月になって初めて選ばせて，その後インテンシブコースとして，3学期間じっくりと学ばせるという仕組みです。このシステムは効果もあげ，各地からたくさんのお客さんもいらっしゃいましたし，関口さん自身も当時はよく講演会に呼ばれていました。

関口さん自身は理念を作るだけでなく，先頭を切っていろいろなことを手がけていました。教材作成についても研究室に週に3，4日泊まり込みでしたね。よく「教材は生き物だから」とおっしゃっていましたから，毎年改訂を重ねる作業もたいへんそうでした。学生が楽しく学べ，効果のあるものを作るために，ひとつひとつ，イラストにしても手作業で作っていらっしゃいました。おそらく藤沢にいらっしゃる前にずっと考えていらっしゃったことをここで全部実現できたのかなと，自分が考えていたものと近いものが完成したのではないかと，一緒にやっていて感じました。学生には「藤沢のドイツ語教育は世界一だ」とよくおっしゃっていました。私としては「本当かなあ，本当だったら，オリンピックで言うところの団体競技で金メダルをもらったようなものだなあ」と思っていましたが……(笑)。

外国語教育に一石を投じたということではとても功績が大きかったのではないでしょうか。関口さんの作ったものを考えると，われわれは今後の慶應義塾のドイツ語教育だけでなく，外国語教育全体も考えていかなければならないとも考えます。ドイツ語は厳しい状況に置かれていますが，だからといってなくなっていいわけではない。どう継承していくかを考えな

ければなりません。慶應だけでなく，日本全体の問題としてもとらえていかなければならないでしょう。

識名　平高さんから教材開発のお話が出ましたが，『ハロー，ミュンヒェン』について関口さんにお話ししたところ，多分彼の自慢も半分入っていたと思うんですが，「これに続く教材がまだできてない」とおっしゃったのが，とても印象に残っています。なぜ，未だにこれを使っているか？　実はこれは平成5年に初版が出ており，9年前にも関わらずまだこの教材に替わるものがありません。最近作られた某ビデオ教材を使ってみたんですが，さんざんな目に遭いました。いかに関口さんが『ハロー，ミュンヒェン』を作られた時に，用意周到に考えられたかが，使ってみてよく分かりました。

大谷　いい教材というのは，彼の合宿の延長線にあるからだと思うんです。合宿で鍛えられ，NHKでも鍛えられて，彼の原点の上に作り上げられたものでしょう。『ハロー，ミュンヒェン』が出るときに，「今度，僕の集大成が出る」と言ってました。彼は何か書くたびに“集大成”って言うんです(笑)。やたらに集大成が多い人なんです（笑)。それだけ一所懸命にやっていたということなんですけどね。

識名　私が教員になった80年代初期，いまのようにドイツ語教育を真剣に考えるという場もなかったし，昔風の教授法がまだ幅をきかせていました。ところが現在，独文学会において，三瓶さんらが中心なってやっていらっしゃるドイツ語教育部会のシンポジウムが中心的な催し物になってきている。しかもかなり多くの参加者も集め，注目を浴びています。つまり，もう従来の文法中心教育法ではダメだという問題意識が，学会員のなかでも共有される状況になっているのではないか。当時，関口さんが声を大にして叫んでいたことが，いまや当たり前に議論される状況になってきています。そのうえで今後のドイツ語教育をどう捉えていけばよいのでしょうか？

斎藤　難しい問題ですね。どこの大学でも文学部は良くも悪くも保守的な

ところがあります。専門の勉強としてドイツ語の原書を読む力も大事だし，その意味からは文法訳読に対するニーズがまだ結構あります。そういう学生層がいるということも理解していかなければならない。ただ，語学教員の場合は，自分が体験した教授法を繰り返すという習性がありがちです。たとえばドイツ語を何のために学ぶのか，何ために教えるのかといった反省も含めて，将来のドイツ語教師に修行を積ませるシステムも急務だと思います。

大谷　社会のニーズや時代の要請はとても大事なことですよね。それである程度，大学の教育も決まってしまうところがあります。過去10年間，大学教育の方向性がすごくブレて，われわれも苦しんだ理由のひとつには，社会全体がブレたことがあるでしょう。何を教えればいいか，本当に右往左往した時代を経て，いまは逆流が始まっているような気がします。それは学部教育に対する要請なんですが，つまり，若い人が自立し，自己表現ができ，他人を理解でき，はっきりしたアイデンティティを確立できるような教育が，大学に強く期待されているという印象を持っています。さて，では何を教えるか，というときに核になるのが「ことば教育」ではないか。単なる知識ではなく，作り出す知，創造的な知，言葉のダイナミズムを教えるような教育が求められているのではないでしょうか。ドイツ語の場合にも，そうした「ことば教育」にどれだけ関わることができるのかで，生き残れるか，廃れてしまうかが決まってしまうと，私は考えています。でも私は楽観的ですよ。関口さんではないですが，いかに生きた言葉としてのドイツ語を学生と共有できるか，そのために必要な教材の開発やクラスの設置など，カリキュラムも含め一連の教育のプロセスを提供していけば，必然的にドイツ語教育の未来につながると思います。

中山　関口さんとは個人的にとても仲がよかったし，最期まで親しくつきあっていたんですが，次第にドイツ語の仕事を一緒にしなくなってしまいました。その経緯にはいろいろな要素が絡まり合っているんですが，ひとつに彼の「学生は僕程度になればいい」という考え方があります。僕は教

える立場として，学生が自分程度になればいいとは決して思いません。自分を超えてもらわなければいけないし，そのための条件を作ってあげるのが教員の役目だと考えています。この点については関口さんと何回も激論して，結局一度も意見の一致をみることがありませんでした。「無理だよ」と言われた。関口さんはとても複雑な人なので，決して謙遜の意味で言っていたわけではないと思います。多分，若い人たちにいろいろなものを提供したいという点では，関口さんと僕は同じはずです。ただニュアンスがちがうのかもしれない。彼独特の諦めというか，人生観が入ってきていて，「僕程度になれば」という言葉になっていたのでしょう。

なぜこの話をここでするかというと，18歳で初習としてドイツ語を学び始める人たちに，どれだけ先の道を見せてあげることができるかがこれからの問題だと考えているからです。大学で学ぶだけではなく，卒業後の道筋もあることをいかに見せてあげられるか。学生全員は無理としても，こう続ければこんな道があるんだよ，レベルアップもできるんだよ，と示すためのシステムを今後いかに構築していくかを考えていかなければなりません。社会に出てから何かの必要性でドイツ語を勉強しようと思ったときに，卒業生の頭のなかに自分の母校が浮かんできてくれればいいですね。

識名　ドイツ語を使ってこんなことができるという目標設定をする場合に，学部の性格が影響してきませんか？　三瓶さんは法学部ですが，法学部の場合は，文学部同様，専門課程に進んでもドイツ語を必要とする学生がいます。逆に私のいる商学部では，基本的に専門課程に進むと学生は英語をしっかりと勉強しなければならないという暗黙の前提がある。学部や学科など学問のディシプリンのちがいによる構築の仕方は，慶應だけでなく全国の大学で問題になっていると思うんです。

三瓶　法律学の場合，ドイツから日本に入ったものが多く，英語・ドイツ語・フランス語は必要十分条件だと言われています。その点では法学部のドイツ語教員は比較的恵まれた立場にいるのかと思います。ところが実情としては，実務に進んでいく人たちがロイヤーとしてのマーケットを中国

に求めた場合，かなり中国語学習に流れていく傾向が強い。逆に理工学部では，ドイツ語のインテンシブコースへのニーズがとても高くて，2年生のクラスでは定員オーバーすることもある。これは1年生のクラスが成功しているからなんです。つまり，一般のレギュラーのクラスを底上げしていかないと，実際にはそれだけのモチベーションが出てこないんじゃないか。いま，法学部ではそういう危機感があります。実際にドイツ語を学びたいというモチベーションをもってくれれば，あとはひとりでに転がっていくわけで，教師はサポート役にすぎません。

いまの高校生の世界観は非常に狭く，世界を構成している言語がいくつあるのかということすら考えたことがない。彼らの頭の中には英語があって，いまの日本の状況なら中国語だろうぐらいの単純な思考法になっている。日本が歴史的にどういう外国語を学んできながら近代化を遂げてきたのかという歴史的理解が非常に浅いんです。そうしたことを大学で1年間教えることはとても意義のあることで，日本と諸外国との関係をもう少し広い視野で，学部に関係なく，見せてあげられるような授業があればいいと思いますね。そのうえで，たくさん開講されている外国語の中から言語を選ぶ。学生が，表層的かつ単純な，何かに役立つだろうというだけの考えで言語を選ぶという問題点を何とか解決していかなければならないと思います。大学に入ってきた学生を，学部の壁を越えてもう一度啓蒙する期間を設けることができればいいですね。たとえば法学部には地域文化論という科目があって，1年生にとっては学問の世界に足を踏み入れるいい橋渡しになっています。日吉全体で，こうした科目をコアにする試みを提案したいと思います。

また，外国語教育はグレードです。学部1年生も大学院生も関係なく，グレードに応じて学べるシステムも，学部に関係なく作る必要があるでしょう。私は，外国語能力というものは計量的な部分と定性的な部分があると思っています。計量可能な部分もあれば，それでは計れない部分もある。計量可能な部分では客観的にレベルを揃えられるような授業の枠組み作り

を早急に日吉でやらないといけない。全体の履修者の数がどんどん縮小していくなかで有効な対策が出せないまま，各学部で人事凍結，クラス数削減といったことが現実的に起こり始めています。その点で大同団結する必要があると思います。

識名　藤沢では，関口さんの理念はどういう形で継承されていますか？

平高　どちらかというと逆方向に向かっているような感じがあります。日吉だけでなく，慶應義塾全体で外国語教育全体を根本的に見直す時期に来ているのではないでしょうか。僕は，外国語は大学に入って初習するのではなく，中等教育でスタートするべきだと思っています。大谷さんがおっしゃっていた，自己表現力理解力を身につけ，アイデンティティを確立するためには，異文化・異言語がよいきっかけになる。外国語は窓と同じで，いまの学生には英語という窓しかないんです。しかし現実には窓はたくさんあって，そこから見える景色はそれぞれちがう。外国語という窓をたくさん用意してあげることで，学生たちは初めて外の世界を理解し始め，そこでさまざまなコンフリクトと対峙するわけです。だから15歳，できれば12歳で外国語教育をスタートするのが理想的でしょう。すると大学入学時点で，初級でなく，中級または上級のクラスがいる。そうすると中山さんがおっしゃったようなことにつなげていけるわけです。

そうなると，僕ら自身が変わっていかなければなりません。教員の頭の中を変えていくことがおそらく一番たいへんなのかもしれません。教員の再研修も必要ですね。

中学だけでなく，高校についても同様です。いま，附属の高校はそれぞれの方向で独自に進んでおり，まったくシステマチックでなく，共通の理念もない。こういう機会に何とか共通のコンセンサスを作れないだろうかと考えています。そして慶應はやろうと思えば，そういう実験的な試みができる学校だと思うんです。

識名　平高さんから，今後，慶應全体で考えるべき語学教育についてお話が出ましたが，この座談会の会場となっている日吉の研究棟も「教養教育セ

ンター」として塾内での教養教育の拠点として位置づけると，塾当局も言っています。安西塾長も21世紀のプログラムの中で教養教育の拡充ということを謳っています。この場所が将来に向けての出発点になればいいと思います。それがこの研究棟を見ることのなかった関口さんに対するわれわれの役割ですし，遺志を継承していくことにつながるのではないかと思います。

(2002年8月6日，日吉「来往舎」中会議室にて)